

説教 『心のほころび、天使の来訪』 山本護 牧師
聖書 詩編 19:9~10/ルカによる福音書 2:8~12

「今日ダビデの町で、あなたがたのために救い主がお生まれになった。この方こそ主メシアである(ルカ 2:11)」。現代人はこの「天使」の言葉をどう「解釈」するのだろうか。救い主誕生に頷くであろうキリスト者は、そこに「実感」を持っているのか。実感となれば差異が生ずる。霊性や敬虔の度合い、信仰経験などによって、降誕を「感ずる」ことには相当の違いがあるはずだ。しかし、それが何であろう。キリスト者は救い主を受け入れ、降誕の現場に近づいてはいるが、その周縁を廻っているに過ぎない。暗闇の中、「光」なしに、羊飼いのようには探し当てることができないからだ。

野宿する貧しい羊飼いらは、信仰熱心でもないし、文盲で聖書は読めず、預言や律法は断片的に聞いている程度だろう。ところが彼らに「主の天使が近づき、主の栄光が周りを照らした(2:9)」。羊飼いらは腰を抜かすほどぶったまげたが(2:9)、天使の話聞き(2:11~12)、深夜の原野を一直線に走り、降誕の場を探し当てた(2:16)。どうやってそこに辿り着いたのか。羊(財産)を置きっぱなしにして危険にさらし(2:8)、希望のない真っ暗闇(世の比喩)の中、「主の光(直訳 2:9)」によって導かれたのだ。東方のインテリ占星術学者らも同じ。闇夜、微かな星の光を頼りに降誕の場へ辿り着いた(マタイ 2:9~11)。

それにしても「準備のなかった」羊飼いに近づき、語りかけた天使とは何であろうか。私はこうイメージする。いわば心の障壁が「ほころび」、そこへ神の御旨が流れ込む「感じ」。それを擬人化したものが天使ではないか、と。個々人の理性や感性には差異はあるが、「ほころび」自体が大事なので、人間の資質は関係ない。ゆえに天使は誰にでも現れる。天使が来訪するために、恐れから「周囲に巡らしている高い塀」や、不信仰による「距離の遠さ」は何の障壁でもない。だから天使は翼がある像に描かれるのだろう。信仰的な準備が整ってから、天使がやって来るのではない。他者と自己、世と未来に恐れをいただいたままの私たちの所へやって来る。そしてまず「恐れるな(ルカ 2:10)」と命ずる。

改めて考えてほしい。信仰の謙虚さで「恐れるな」という天使の言葉を聞き、ほっと安心して、周囲に建てた塀の扉を開けるのではない。恐れているままの私の真ん中に突如として天使がやって来る。そして私は、否応なくその言葉を聞く。「今日、ダビデの町で、あなたがたのために救い主がお生まれになった。この方こそ主メシアである(2:11)」という言葉。「あなたがたのために」とは、そのまま「私たちのために」だ。その時すでに私たちは、明らかに「恐れることはない(1:30)」状態にあるのだ。

私たちのために「救い主がお生まれになった」。「救い」とは何か。羊飼いとてそれを理解し、希望に胸ふくらませて闇の原野を走ったわけではない。恐れから解き放たれた私たちは、救いの何たるかを見るために(2:15)、世の闇の中を往く。「主の光(2:9)」に照らされ、あらゆる恐れから解放されて。

「主の命令はまっすぐで、心に喜びを与え、主の戒めは清らかで、目に光を与える(詩編 19:9)」。降誕の告知は、私たちへの命令と約束。それに応える私たちの心は、真の喜びを得、「主の光」は私たちの「目の光」となる。私たちの不安と“恐れ”は、「主への清い“畏れ”」に転換し永遠に続く(19:10)。



【おまけのひとこと】

幾代も変わらない朴訥な羊飼いの 信仰は簡素ほどいいわけではない 百科全学を収めた占星術博士 知性で信仰が啓かれるわけではない 主の光が彼らを招いた 彼らの中間に位置する私たちもまた